



重修真書太閤記

九編
四

13
459
81



特 13
門 家
號 459
卷 84

福 兼

重修眞書太閤記九編卷之十

織田信孝濃州没落の事

柴田滅びて越前平均に佐久間虜られて加賀關國
となりてありて筑前守入國ありて織田社をいへり
白山平泉寺石動山其外士農工商と安堵をいへり
之に皆万歳と祝して御禮を申し爰に三七信孝の
濃州稻葉山瑞龍寺岐阜三城に楯籠げると羽柴美
濃守の執權藤堂源助高虎三好孫七郎の家老皆川
山城守氏家内膳正と始に二万餘人をして攻めんとす
北國勢三万余人をして江州柳瀬まで出張をいと聞

同 政
會 印

城中堅固し持ひこへけるまう寄手も責あへて見えし處に天正十一年四月廿五日の暮方美濃守の家臣小川下野守走來り馬を城近くへ止大音揚去せ一日の戦に北國勢敗軍し佐久間玄蕃元柴田權六兩人を生捕廿四日申刻より北庄落城し柴田夫婦とも自害しつゝ北國平均して筑前守の手に入たり然れ誰う當城を見繼可申哉籠城の面々何と目當に休えあふよ早々出城ありて然るへしと呼ぶるに城中よての寄手の謀あるへしと疑ひあう敵陣へ忍びひと入て聞しるよ柴田滅亡相違あり然らぬ當城に在て運で開くへ道

あしとおのひ定め齋藤玄蕃龍之稻葉刑部貞之岡本五右衛門安元いつとも城を脱出降人よなりけりまう城中以の外に騒と立しるに廿六日追手搦手六万餘人よて攻りける稻葉山の大将團平九郎政之國分佐渡守堅固に防さしうとも士卒大形落失しるに平九郎政之生年廿二歳切て出能戦て討死を兄の平八郎へ去年六月二日信忠卿の御供し戦死をり兄弟共無双の忠臣といひつべし國分佐渡守も能戦て討死したり生年四十五歳とりや瑞龍寺より織田新八郎信包峯信濃守平田壹岐守一万五千餘人よて籠りけるり次第に落るをけ

るよりの手勢を引具して岐阜へ掛入ひし
の瑞龍寺の城の自然と空城となりしに又岐阜
城より三七信孝新八郎信包二人大将をして籠りけ
るを寄手六万余人をして攻めるよりの城兵段々落
失くつるよりの千餘人となりしに此勢よりの一戦し
討死をんと切て出むしうとも寄手たゞ遠失よ
射て敢て手痛く近付もをさうけるよりの去の城
に歸りて腹切んと味方とみまの二百余人よりの
よりの寄手よりの筒井順慶家臣松倉右近等尾宮内
城際へ至りて申けるに當城の体落去遠く見
受けしに御開城あるに左に順慶急度

筑前守よ申勧め一國を進申の様取扱ひ可申ゆと
述べしに三七殿の仰らるる様我柴田と共よ約
束をしこあり然るに柴田約を守りて滅亡は今も
至りて我も亦黄泉に趣と勝家よ面會し共よ故
殿よ仕奉らんと思へり何の面目ありて猿面即の
處分と受一國の主と仰らるるに云と云て聞入むよ
氣色もよろしと家臣等志さるるに先御開さあ
りて又思召立むよとあるに爰よ御生害を
の詮無と勧め奉るもの多りしに忽ちおのひ
の間の苦勞と厚く禮謝あり各のつとへり共退

散あるべしと宣へしおのひくく落行けりさての
ち三七信孝新八郎信包諸士五十餘人と召具し城
と開き尾州知多郡野間の内海へ至り大御堂寺よ
入て閑居しあり

野間内海村並村大御堂寺真言宗長野万徳寺末
なり此寺よ左馬頭義朝鎌田政清の墓あり信孝
墓の塔頭安養院あり右大将平朝臣浄岸大禪
定門神儀天正十一癸未五月七日と記と一
位牌あり

三七殿の附人よ来田彦右衛門といふの心替り
しと信孝の御前よ出申けるハ筑前守の下知と

て此邊中と討手の向ひひゆる雑兵等の手みの
らとむとんことと織田御名字の恥と御座し我
我防と可申し其際と御計ひゆると申げとハ
三七殿さとい欺り口惜ゆとて腹と切ぬハ
ける刀の血初とらり床よりけたる墨梅の一軸
へさつとめり其墨梅今と此寺よ傳へ
と信孝最期よ

と詠しとて果あふ生年廿六歳あれと見て新八
郎信包あふ腹と切ぬハ今ま付纏ひたる
諸侍のつとも思ひく腹と切てけり然るよ来田

彦右衛門へ信孝の御首と酒と浸し同意の者とも
同道して京都よのり浅野彌兵衛と付て言上を
しうの筑前守大に驚か歎かむ我天下の為よ岐
阜の城を圍つこと正敷主君の御胤より
遠卷よその心と近々とい寄もを只
去すよまの様に計ひし何とて御生害と勧め
奉るよその然ると附人の身とて助け奉らん
心を却て御自害ある様と謀りて御首と持參を
し心休實よ以て人面獸心とやん人非人の不
忠不義の世の見あらよせよとて栗田以下六

人ののの信孝の墓の前よ磔よりけり心
地と皆人悦ひ秀吉の計ひと感しけり然と七
本鎗の面々よ新知五十石と賜らり其上よ感状と
添あへり

甫庵本よ感状と載たりそのこと云く今度信
孝對某及梓楯有可亡秀吉企雖為前將軍信長公
御連枝今也不去両葉可用斧柯事在手裏殊柴田
修理亮瀧川龙迹將監與被仰合之儀決然也依之
至濃州大垣之城令在滯可攻伏岐阜之城之處柴
田之先勢柳瀬表致出張之旨告來之条不移時刻
走歸於柳瀬決勝負之刻竭粉骨合於一番鐘突退

群雄北國勢及敗亡事偏在尔之武功矣加増領五千石令宛行者也仍感狀如件

天正十一年七月朔日

秀吉判

又加藤虎之助の主計頭同孫六の左馬助片桐助作
へ東市正平野權平へ遠江守糟屋助右衛門へ内膳
正脇坂甚内へ中務大輔福嶋市松へ左衛門大夫と
改めらる石川兵助貞友り母よの金銀若干賜り
懇追福と營ををぬひ五月七日佐久間玄蕃允盛
政柴田權六勝久兩人と誅をらるへとの定あり
よの洛中と渡し其後六条河原と生害あるへと
由り奉行へ淺野彌兵衛尉長政とと權六郎へを

ひ痿とて是非よ及くるる体骨體と徹と見へ
たり玄蕃允盛政へ中川と討取しのち勝家の下知
ふ任を早速本陣へ引取あへ何てりこの期よ及ん
んや戦功を全くと上方勢と侮をへ秀吉と我と
くをんめのと果報いとも筑前守りかといひ
めり淺野彌兵衛尉のれと聞其方今と臨と何
のたことと云とる其口よと念佛よとも題目よと
も申とりいと云て笑ひしり玄蕃允聞て彌兵衛
たしり聞その方あと足輕の作法の知たるあ
ん武士の志とい知よと詮ありといあへ
とも語りて聞をんらとけの昔保元の軍破とて

鎮西八郎為朝平治の合戦よこしも勇猛の聞高か
りし悪源太義平何れも八幡殿の孫彦あまとも面
縛の恥逢あへり盛政一人のくる身とありし
あはれ汝等もまゝいけり我如く敵は虜る時
あるへし其時思ひ知ると云つ料紙硯を請く
世の中をめぐりもくるとぬ小車いぢ宅の門をのりあ
佐久間玄蕃元盛政生年廿九歳と記敷皮ふ居直
うそとくそと首と延て討をけり權六郎勝久ハ十
七歳とうの盛政ハ古大學の嫡男母ハ柴田勝家の
姪なりこれハ勝家とい叔父甥の間より別て親
めりけるるる加州金澤の城主とて其富其勢

との勝家の養子伊賀守勝豊の上より出あり然
るに斯成果より二人の首と梟木ありけり
流布本玄蕃元と石田三成と口論を由と記と
誤あり三成こと一廿一歳のまを吉といひ
頃ありのまを奉行の列よりあり
又勝家の妾は佐野と云女あり是ハ佐野源左衛門
尉常世の末孫は六郎と云一の女なり六郎元
ハ上野の國の住人なりけるら流浪して越前とい
たりと勝家不敏と思ひ召抱置し六郎病死を
しりハ其女と勝家の許に養ひ置終る妻となり男
子と生をたきとも存ざる旨ありとて披露を以三

之助と名付中村文荷齋と以て幸若村とゆく養育したるけると勝家おのひ出し自害の前は彼佐野よ云ふくめひそくは城中と忍び出さる幸若村の三之助も行衛と尋ねて柴田の家系と相續さるよと厚く教訓し北庄を落たりたりとなり

幸若大夫事

并柴田の妾佐野柴田三之助も遇事

越前國大野郡に幸若大夫といふものあり聖徳太子の御時百濟國の味摩之り傳へて伎樂の舞を以て家業といひ世より是を舞々といふ如何ある幸若といふと其家筋と尋ねるは挑井中務少輔直

和都の軍に打負ふの越前國へ落來り大野郡に忍び居たりける舞々大夫の娘は相あれく一子と産しめ幸若丸と名付けり中務少輔の二度軍と起して都に上る外祖父のける舞々大夫幸若丸と愛しそ育て終は我家と譲りてけり兎角とるると幸若丸も成人して父と尋ね都に上り能軍功ありてひありけるは挑井宮内少輔直詮といふ然るは直詮の子に幸若丸といひしは松田といはる舞大夫の娘に親しむ一女一男と産せり女子は松田の嗣とて婿と彌次郎といふ幸若丸の血筋なりといふとと知をんため幸若の彌次郎

といひし男子は桃井式部少輔直繼といふその子右京亮義繼その子式部少輔義矩その子と幸若八郎義安といふ是よりして桃井といふはその子八郎九郎義重木下藤吉郎と親しかりし越前責の時朝倉の調略と聞出し告知を忠節ありし信長公は御目見し長光太刀國光刀并し若狭盆と拜領を柴田入部とける時幸若由緒と申て侍みありしゆとありしつととも柴田は羽柴筑前と親しむ幸若おれの間漏りて居たりける彼勝家の妾佐野り産し男子と中村文荷齋り才覺りて此幸若村の舞々七九郎といふの預け置金子あ

す取をけるし七九郎甲斐く養育し三之助と名付置し七九郎夫婦あ病し侵され終に死亡し残るは三之助只一人の幼稚のとき如何とも為し様なくあは居たる處し七九郎の甥ふ友九郎といふのあり三之助と引取養育しつととも元より心よりぬりのほし文荷齋り許し行てさあくし偽り金子と貫ひあとしのち三之助といは八郎九郎の許へ替古のためとて預け置その身は何方ともなく逐電たりけり元より孤のこていあり誰ありて問音信のものなり八郎九郎許し實りある年月と送りける勝家氣比

宮上参詣一國中のめのと召集藝能と盡こせける
 時幸若も始て勝家を見参しけるは勝家幸若と近
 く呼て盃と與ふ幸若つくと勝家と見るは我家
 の養ふ三之助も似たり宅へうりうり三之助
 と呼出し見る見さへいふく目鼻もうりうり耳首の
 の格好もと真同くあつげし由緒もあつや
 尋ねても友九郎へ行衛しとてはこととも三之助
 年と取れ従て力ほり打物取て達者なりうりも
 も由あるのの子なるへいとあつ計りて強よ
 穿議もをれその内は北庄落城し柴田滅亡と
 ぐは又おのひも出さば然るは勝家の妻佐野は勝家

の遺命と受て城中を紛といてそあつこつこつ
 手足は垢つと穢とつれは近ある人もひり人の軒
 端は夜とあり田屋の藁生は疲と休め越前一國
 經めくうて幸若村あつこつ時ハ心神ともふ勞
 とこつと一歩の進と一歩の下とあつ詮方あつこつ
 まつとある杜の木蔭はうりうりあ一方行末とあ
 ひ廻らしめとへと見さへ苔むしと年奮したる石
 の宮あついりある御神うり知はとも尋ねる若君
 世はゆりゆりこの御行末と守りあひ妾息あつこつ
 ちと廻り會とあつりこつこつ此世はまうまうは

御墓所と知をわへりあはれ尋ねまのいらをんと心の内よ祈念しつゝ念に疲れてまゝとらめい正しく我子よ廻り會ひ嬉しむとあのみしは只是一場の夢にうゝうゝの總身よ汗をなすつゝ石の宮居よ顔をつゝ又めのくるやうく見つゝよけりめらる處へ三之助何とらうやく來のり見せし疲れて女之神と祈りて物くるこゝ若君の御行末と守らとわへ我子の消息知をわへと云との葉の耳よ入い三之助子心よ我身も孤なりゆりなる人の子ふりあらん母あはれあのみ如く尋ねせん父あはれ父の素生と知へるよあはれ此狂女の尋ねるは如

何ある人よあるやうんをめで其名を問てらんと佐野うゝたる傍よ進みり御身の誰たるぬるは何人をと問て佐野の眠氣なる眼とわへ拭ひ三之助と見あけ見あうたりうみ見ると修理進とのふ生うつゝとののこゝの聲音やと正しくその人よ逢ふちのせらるるふりり忽ちゆらちささささささささ少入る我身よ尋ねるあり御身の年いつつ名は何とのらやらんのりや御身の父の名と七九郎といひてささるかといふとて三之助もうち驚きゆりよ我身の父の七九郎今いなる人となり母あはれとてよ別きて

今いなり何とて我身の父の名をい知あふやうん
あまりの不思議とむつうまのその七九郎といふ
名というとどうよ覺てあうやう何處の人とも聞
さうさ御身の年の十二歳とあうつうんとつとれ
て三之助中驚さいうあも十二歳とつとれと答ふと
の龍の腕は黒子あうん足の裏は黒い疵のある
さうといつと三之助もさう肝と潰しそれすて知
つる御身の我身の何とてやうさうをゆとあつう
しうれは佐野の疾とあうし然に我子とあうめ
や尋々て千辛万苦さても只今告あふ正夢へはれ
はる宮居の御神のさう引あふとおわえさう如何

ある御神り覺束あう若君は此姿とて名乗あふも
くつうと肩はうけさる編草とげの縫着したる
縮小袖さうと着うへて坐と正しあれの越前の國
守北陸道の總管領柴田修理少進勝家公の末期に
めとて遺言状とあう御身の父御はう今やう
の父御七九郎はうりう養育うけしすとも勝
家公さう多くの金銀送りあへは養育の恩は金銀
よてつくのひたり今さう真の父御の心と繼天下
ふ武名と顯くしあへといそれて三之助佐野をう
ち詠め左様の事り真實あう我身の種性正しさめ
のさうやう黒子の疵は證據と似て證據とあう

いふとより外に御身の子といふあるしありやと
あしうへを三之助が利發のたまりおあれらるる
譽の侍の強ゆる氣性と佐野の悦ひ水飲のため
用意を盃に御手洗の水と汲とり守刀を抜取て
子指と突切血と出し盃の水に入ませ三之助の指
の血とそくさし不思議の一川に混合しけるよ
う三之助も疑とさうさくは母御前が我子の
若君りと互う手と手を取てさうさくあり
て三之助とさく改め然に我父の柴田殿よと御身
の母御前のさくして筋目ふさ舞々の子とおのひ居
つるよやうさる我身なり此上の亡父の遺

状の旨み従ひ共天を戴くこる仇の日の出の秀
吉のうへさう天下を經歷て武藝と修行しその
上よて本意と遂て修羅の苦患と休めんと佐野の
ろともみ身と起し立退んとさうさく又思ひ
へし今よて養育されつる幸若八郎九郎は無沙汰
せんも道ありと一通と認め幸若のめとく送り
けるその文よ

我等事永々預及抱ゆ御恩の高く深さとたとへ
の蒼海も猶あさく泰山も却てひさくひ然る處
眞實の柴田修理進の子よていへい何事をいひ
し時御身も殃のめくりいめと存いみ付て

當所と立のさ申し万々一仕合の事いそく厚く
御禮可申し恐惶謹言

六月

柴田三之助

幸若大夫殿御宿所

とあうけるよふう幸若も仰天一緒の柴田の子あ
うけるうあそろしく何様のこり合よなうぬも
もうるへと下心よの悦ひしうの尋ねもさるこ
の八郎九郎へ京大坂まで参向しひささう秀吉公
暱近としくひ二百石の地とさく給らうよと
重修真書太閤記九編卷之十終

重修真書太閤九編卷之十一

佐久間兄弟紀州江落る事

并粉川法印諸浪人と誘ふ事

北陸道の總管領柴田修理進勝家その本貫へ足利
の一門斯波の一族として尾州の甲家あるを以て
織田家よても家老の上首たり然へ信長公も重さ
めの用ひしと諸將のつとも其下風よ立とい木
下藤吉郎の苗字改むる時あの一文字と請求めしあて
知してさう木下藤吉郎へその母と知て其父と知
とさへ氏も素性も論よたさへ但その方寸の膽

畧と以て信長公の草履取らう立身一長濱小谷の
城主といひり遂に羽柴筑前守と名乗山陰山陽十六
ヶ國の探題職として別所と亡し浮田と降し毛利
と威して三城と屠り亡君の仇と報し朝家を安ん
し大儀の葬禮と勤め主君の遺跡と定む是等の大
功諸將に超過しつゝと勝家深く是と嫉し如何よ
もしく此事と妨げんことを謀りつゝとも諸將匠作
の偏執とて是と與力とするの鮮し是に於て天
正十一年三月より織田三七郎信孝朝臣瀧川左近
將監一益等と共に筑前守と翦戮さんことと約しけ
る瀧川の勢州に於て筑前守の為に敗軍一三七

殿ハ濃州岐阜に籠るといへとも筑前守よ押えり
とて首とたし出り得る勝家江州に陣し賤岳に
戦ひし軍利あり毛受勝助り忠死しつゝと
つゝと身と以て遁し佐久間玄蕃柴田權六ハ虜ら
し勝家遂に北の庄に籠りし不日よ没落しその
身死して國滅ひ所管の北國とて筑前守よ隨ふ
是天時人運の然らしむる處といひし功と
妬との差分知しつゝ爰に佐久間久右衛門尉安次
舎弟源六實政兩人ハ賤岳の圍と切殺されし勢
州に落行終り紀伊國にのり那賀郡根來寺に隱
居たりけるその頃粉川寺の三智法印と云ハ

母方の叔父なるを以て兩人とも粉川と趣き法印
とたのむと世と忍ひつゝ賤岳の消息と聞けり勝家
敗北して越前亡ひ北國平均して筑前守に從ひ兄
玄蕃九弟權六郎の虜として六条河原に害をうけし
由あるに無念なるにやまゝ伯父法印に向ひ
我等兄弟の世と忍ひ天の脊とくくめ地ぬさ
足して隠れ居ること只命とおしひ故と御推せり
も恥づきしへとも賤岳の軍利あり味方の勇士
多く戦死し重代恩顧の者去ともと存せしめの迄
落失ていよる一方と切抜戰場をのりて二度軍
と起し會稽の恥辱と雪めいんんと今日迄も命を

たむひひ然るに勝家自殺して北庄滅亡し北國平
均に筑前守に從ひ玄蕃九弟權六兩人も筑前守のた
め六条河原に誅せし由たり承るるに
斯てい我等誰為義兵と揚へし時と知し然る
ゆへ件の人々のためは一戦を企て修羅の妄執を
とらし申さんと柴田重恩ののの共を語りひひ
つゝとも秀吉の威勢をおとてんと同心を
ののちひ毛受勝助に勝家よめり忠死を
しと芳譽天下ととらるゝ其外北庄に戦死を
小嶋若狭守父子松平甚五兵衛父子松浦九兵衛吉
田藤兵衛父子あゝひは同姓十藏あんと取々名

と揚譽と傳えいし我等兩人の戰場をくつしと命
 とたしむのものと他人の朝らとい事實々以て残念
 至極よ依て自害仕り今世よある修理殿とし
 め兄玄蕃殿以下の幽魂よ申訳をくゆと存ぞ定めてい
 と涙と流しうら口説いぬ粉川法印ものいぬ
 兩人とよびくしと打守りため息繼て申けるい叔も
 叔も人の運の末よの智恵の海淺くやう心の燈暗
 くはよりぬと承りうゆ實もく偽りていなるけ
 う其方二人の尾刈よても名ある侍ある上弓箭を
 握ても多く人よ譲らぬ一方の固めと人も許さ
 めのあるう左様よ腰の抜しとこと不思議ありと我

等の出家の身あはとも其方二人とゆき置
 めよりの命とい無のものとたのひ定しあは是と見
 りぬ兄弟共といひつゝ佛壇の障子と開けの過去
 法印三智と記をし位牌あり兩人とよ來る涙とた
 さくめし追思召切ありて我々と御抱の糸のの
 代より報奉るへ然とて我々今身の身と
 如何よせん出るも入るも兄弟二人と云い法印あ
 る笑ひを様ある心あはの腹切てあんど云甲斐
 日より兎しと角しとと工夫を凝しとありし
 其次第の抑河内國の三國峠霧坂の城代羽柴三左

衛門尉吉長の年若くして柔弱めの隨身の奴原一人として手立のめのあるへりて此霧坂を乗取て楯籠りの要害のり小勢よても一月半月のちこころへ南河内の長野烏帽子形の城に織田源五郎長益居あへと臆病第一の性質ふを急に出陣して手と合をともあるへり然拙僧の扶持置處の浪人百五六十人あるへり又粉川の地下人より頃息と加えしめの二百餘人いたりありそれらう一類眷屬すと催促したるのり二百餘人あるへりその外より三好松永の殘黨とより集めはるは是も二百餘人あるへりさなるのり都合六

七百の勢ありしと著到と付しとて筆取呼寄書記とて大内義隆の家臣杖彈正が孫杖彈正左衛門尉關東上杖房能の老臣山谷周防守國實の孫山谷伴大夫國延三好家の浪人下掛兵庫同左近少允朝倉の浪人中嶋刑部右衛門尉同平九郎三段崎玄蕃頭の子孫同忠七郎村井長門守の長子同長左衛門尼子勝久の家臣力石刑部少輔の孫同小平太久繼松永彈正の家人鷺岡十郎兵衛貴崎主膳のり皆信長秀吉と怨むるの深さの共なり此外より明智ふ仕えり丹波侍山口本山本庄木戸園部田村内藤ふとのりよりの六七十人のりも秀吉と討て亡君

の恨とくるげんとおのよりの共なる其勢合をて
 七百八十餘人佐久間兄弟大なるうらひの霧
 坂へお寄一合戦して城と攻援んと勇立と法
 印おとらめ如斯義兵の集る上の何条をて
 あとくげんや我の一川の謀あり一手よの佐久間
 兄弟と大将として貴崎主膳以下大和河内の浪人
 二百五十餘人佐太枚方の間に埋伏さを一手へ村
 井長左衛門下掛兵庫と大将として百五十餘人よ
 郷民共とさ添霧坂山の東の谷際なる林のけ
 らめく置鐘大鼓と打て味方の氣と助けさを
 まの一手の拙僧大将として三百餘人の霧坂の搦

手より切入へ城門に至るところ會圖とあるけ
 しの佐久間兄弟大手より進こ入へると約束し扱
 鷺岡十郎兵衛と淺野彌兵衛と組下黒川丹下と云
 のよ出立とたり但急用の飛脚あれの郷民七八人
 と先よりらを鐘持草履取のつめの如くよあ
 らへた道の路次の百姓原よのさすて宝寺より
 何ある急の飛脚やうんとおのよとらうよと質の
 のちうんとおの氣もつう路とゆりてめこあり
 つ其駿足と感しけり又扱彈正左衛門へ農人よ
 身とゆ川霧坂よのさ羽柴三左衛門尉と城と
 出るよ見たるの直味方よ告よと定め山谷伴大

夫ハ商人あまひとよりりておあ〜霧坂きりさかに至り容子ようまこと見
 と〜法印ほふいんの方へ知しを〜と約やくと〜とめカ石小平
 太久ひさひさ繼つぎハ旅人の体ていよりりて枚まきと山谷やまやとと見繼みつぎを
 たり加くわ様やうと口々の手てと備そなえと粉川こながわ法印ほふいんハ田舎
 山伏やまぶしの七しち大寺だいじ詣よみをる体ていよりり立霧坂たぎりさかのあ〜と行
 川がわつ〜川がわ二三度にさんどたり〜ハ此城このまちの大手おほて搦手なつてを
 の外のうへの道みちの高低たかひひ足場あしぢやうの〜と見明みあきゆんり為
 みを〜と知人しやうじんも〜と怪あやむのものも〜り〜ハ羽柴はうしばい
 三左衛門さんざゑもん尉ゑう油断あぶらぢりの一つと〜と〜と
 鷺岡ささぎの岡十郎じゅうらう兵衛べゑ價や使つかひの車くるま
 并なら粉川こながわ法印ほふいん霧坂きりさかの城しろと取車とるくるま

あ〜霧坂きりさかの城しろ代羽柴たへしばい三左衛門さんざゑもん尉ゑう吉長きちぢやうハ筑前守ちくぜんしゆ
 の命いのちよりりて入部いりぶ〜と〜も三好みやう松永まつなが滅亡めつじやう〜明
 智光ちかう秀山しゆせん崎さきハ敗まへ〜のち畿内きい平均へんぐん〜と秀吉ひでゆきの武
 威ゐいとあ〜と疆域きやういきのうちと〜と静謐せいひつあり〜と近
 邊きんぺんと〜と無事むじとたの〜と萬民ばんじん快樂けつらくよりりける時ときと
 あり〜とたの〜ハ三左衛門さんざゑもん尉ゑう朝暮あさぐさ酒さけと愛あい珍味ちんみと
 求もとめ〜ハ傾城かたしろの美女みよめと酌しやくと〜とを迦陵たらう頓とん加かの
 妓女きよめの聲こゑと愛城あいじやうの外のうへと見廻みまわることもを空くう〜と月
 日ひと過と〜と〜と家中やなかの諸士しよしも上うへと習ならひて飲
 酒さけと無明むめいの眠ねと催もよほす雉子けいこの燒鳥やきとりと舌鼓しつこと〜と
 と打う〜と外武藝げぶぎとた〜と〜と鉄炮てつぱうの穴あな

ハ蠅取蟹の栖とやう弓の弦ハ天崩の匂ハ絶て鏃
ハやからひハ鏑付たるさまをを目ハ無用心と
あつてゐることも其主の心よハ是も秀吉の威光よ
結句手柄ハなすたりけりあつる處へ城の南より
砂畑と蹴たてて飛脚の早馬より來り城門際ハ
馬のりこみハ是ハ山崎宝寺より火急の御使ハ
と呼そりけるより三左衛門尉ハ即等東条武大
夫佐原清左衛門あれと聞付何事とこのハ是ハ
淺野彌兵衛組黒川丹下より火急の御使大事の口
狀ハ傳ふてハ申入るここのハ三左衛門
尉よりくと通しけむいそ此方へとのハあり

武大夫清右衛門案内して書院ハ請とれハ三左衛
門尉立出何事の御使と問ハ丹下さんハ密々の
儀なれハ彌兵衛と存知をいたく三左衛門尉殿
早々御參あるへとの御説より何なる急用あり
とも打とて宝寺へ御越して然るへと彌兵衛ハ
吳申てハ其上口狀申早くなハ早々引くへハ
と是中ハ彌兵衛のこ圖ハ早御暇と黒川ハ元
と道と引返と武大夫清右衛門一同ハ使者の容
子のうも火急の事とあえハ遅刻あらハ後日
の難義ハ御發足ととむるより三左衛門尉
取めのも取あハ馬ハ打のり馳出をハ武大夫つ

六月廿二日編年一

川さて供たり渡野の組下黒川丹下ふ欺むうと
三左衛門尉主従思慮なく霧坂の城と出宝寺へと
懸たるの武道とことと城と預る故實と知さる故
なるへ黒川丹下と名乗りの粉川法印の手の者
よて鷲岡十郎兵衛なりとの神あぬ身ののりく
う知ん哀れとてうのさ次第うか十郎兵衛霧坂を引
返り三左衛門尉出城とるや否哉山谷カ石ののめ
共より佐久間兄弟并は粉川法印のりこへ斯と告
知をけし今よて處々よ埋伏したる軍兵とゆい
つとも得物を提げ佐久間兄弟よ従ふて霧坂の
城よのさう是の宝寺より秀吉御のさ一圖とて

當城加勢のため罷り向めてゆといひりうの佐
原清右衛門立出られを見るよのつとも羽柴の印
付たる法被脛切着たりけるを以て歎ありとの夢
あも知を引入て爰やうとへ引糸彼是とことる處
よのつとも知を相圖の狼烟とおやしく一發とる
と俄に山谷も震動とるころう鐘を打大鼓とた
る螺とあさ鯨波とつとあひ数百万の寄るう如
くあひたりあの何事とと驚く處へ村井長左衛
門下掛兵庫大将とて無二無三よ突掛り城門際
よ押し寄鉄炮を打ちけ城の扉と打破る佐原清右
衛門あこととひ士卒と下知しを防ぐんととれ

の最初も宝寺より加勢の為にとて来りしものとも城中とてしり廻り突てい切切てい突けるよ何とも敵の味方と定めりも見合ける内ふ多く城兵と打どけり清右衛門の不思議然に黒川丹下といひしもの秀吉卿の御使もあるよし何ののなれい如斯くうて城主とおひさ出をいよは是れとの計策とあるもの小人数よてい有へうは誰よあんとあはれしよとひ本丸へ閉籠らんととるを見て佐之間兄弟前後より追取こめ突うしよの清右衛門本丸へ入ともあはれしよと火水おなりて戦ひしよとも實は不用意の折よそあ

う防く勢の少し今に戦死とて時節到来と思ひ切てと戦ふよりめくる處よ搦手より粉川法印三百餘人と三手よ分て面もあはれ切て入りあはれと幸と振舞ふりよと城兵よと百五十人討どけり三左衛門尉の宝寺よとて浅野彌兵衛尉と尋との折しも上京して居あはれを以黒川丹下といひのを問はれい丹波ののよて既よ帰國たりといふ然に火急の御召何事と申出よ石田左吉立出て殿より昨日より伏見の里よ知由して假ふ出あはれ深く忍をあはれ由あはれ我々よものつくと定うよ知をあはれ如何急の事ありとも申

大層言九終者一

上へと便宜ありといふ三左衛門尉肝を消正しく
浅野の組より黒川丹下といひしものよ面會仕り
それより申し火急の御用殊より密事人傳ふ仰ら
しと早々參上仕ととの御口狀を故に馬とて
らを神速に參向仕てゆはり左吉との御戯も時よ
る三左衛門う只今參上と御披露たのこ入とい
へる三成眉とひそめを思議のことなれい
ゆよといふよ黒川丹下の四日以前母より重病とい
ふことよて御暇申て丹波へ飯る今日使よ差つとい
くことなり浅野の昨日の暮方より御所の御用よ上
京したれ何とて左様の密事を取次つと但御邊

の霧坂の城代より城代と云い即城主も同一義あ
り國の目の職のめより召遣ふ人と目代といひ
長官次官主典と四職のうち判官の職に充る人と
判官代と申あり然に御邊の霧坂の城を明ての參
上へ當然の勤と闕と申へ此後とても左様の
御使あるはるの城を明ての參上仕りゆと申
されゆへ但それゆとの謀を行ふゆよの必定霧
坂の城といふゆ人よ取とあひあらん氣の毒や
といふことよて三左衛門も大に驚と赤面して承られ
の淺々したるゆとてゆこの恥ゆと仰の如く
心元なり武大夫より引返をと下知しつ猶も左

吉お追従しつづきよも御前の首尾を頼と申はと幾
度となく額つゞきてゆく馬と引返を武大夫く
と聞らるも南無三寶とららてけりおのど何物
のど我々を欺さしと思ひ知さんおのひしと
鞭と鐘と合せて馳たりけり霧坂よて佐久間兄
弟飛鳥の如く振舞て前よ顯るれ後よめくは鉄炮
と打を畑の下より長柄の鎗の穂先のところへ突
まじの佐原清右衛門今は是追とやあひひけん寄
手の中へ切入て五七人と薙たよその身も數々
處手と負しうの一足も引は亂軍のうちよ討どけ
り佐久間兄弟勇とたち當城の主羽柴三左衛門と

大隱言九卷之三十一

へ追出その家老たる佐原清右衛門とい討取たる手初
り物とも進めと下知しつ終よ本丸よ切入三左衛門尉妻子と
捕て一間處よあしめけり粉川法印の搦手より乗入二三の丸と
切平け追手のく見廻る處へ東条武大夫を帰し何ののど
淺々一謀と以て三左衛門尉殿とあひと出しその跡へはつて
此は合野伏百姓ふんとの業あし何ののど名乗くよを
めひどの粉川法印大音あひ淺々と謀と行ひよその淺々
敷謀よのど居城と捨し虚氣のの三左衛門尉とれ
よ從よ雜入原大く打捕つよもよ名もひの
の首あし溝堀よ打棄たり其方ハ三左衛門尉の即等
のめ何人のく聞やわしとて武大夫とて

大隱言九卷之三十一

十一

ぞうたら誰よりある名乗といふよ名乗めを以定めて野
 武士強盗はもその義はの手の下は打取味方とて
 たまごりの供養おとす中におののりとてお退とて
 切てゝる法印くくくと笑ひ其方共は逢て名乗つて
 あつたも真途の旅の土産もをそのとおのり
 大慈大悲の心もつて聞そよつては是は紀伊國
 新川寺の三智法印とい我事なりといひつて長柄の武士
 と左右は立武大夫とめけて突てゝる武大夫は新川法
 印と聞ても悪し法印只一打と十文字の鍵の
 りつめ法印は長柄とてめけて武大夫と取こめ責まら
 佐久間兄弟くくと見るもつて馳來り東条は切てゝる

東条進んで法印は近つくと法印と見て推參り下船めと
 つの聲と共に搔つて目も高くさへ上てうんとつひつ投
 ひて二丈計と打つて立ちたる寄手の中へ打こたへ
 何うにたすへて手取足取散々切刻形も見へあつた
 けりあつたのちの城中は手またつめのひもつげは城戸
 とつて討死とて死骸とてほけ掃除して法印本丸に入
 りてさそこのち人数と改めけるよ七百八十餘人のうち七十三人
 討死して其外は手負ひ五十餘人とう敵と討取し負ひ二百余
 人と記しける中は佐原清右衛門東条武大夫首くつり大手
 の門は切つてつて

一書は霧坂合戦天正十一年七月二日の事といひ大坂城普請

ころめの頃より秀吉卿の多事なるを見て粉川法印事
 と起すいなりといふ杖彈正左衛門霧坂山より敵と討事
 十三人誤て深谷よ落一夜經て城よ入猶十三の頭とふ
 さひ人あをを以てその勇と稱せりとうや山谷伴大夫
 の敵の馬と奪ひ半途よ出て三左衛門尉の宝寺より
 歸ると待けりよ三左衛門尉伴大夫馬と見知味方ふ
 らんとちりひ近々とのり寄伴大夫よ肩ささこと切られ
 て逃のひいとつり是等の事本書よ載と但土人の口
 碑よ傳ふる處なり因て爰よ記して他日の校成とす
 川

重修直書太閤記九編卷之十一終

重修真書太閤記九編卷之十二

佐久間兄弟佐太の森合戦の事

并羽柴三左衛門尉宝寺へ落る事

粉川法印のたのふや霧坂の城と乗取佐原清
 右衛門豊秋東条武大夫定秀と討取城中の掃除
 て城門の手配と定め丈夫よ籠りける佐久
 間兄弟進出て申様御計畧の通り手間ひまうけ
 と一城と打破り入替り事比類ある高名へ申計
 あくひへの勝ての兎の緒とメると申世話も有
 又ハ螳螂蟬と窺へ後ハ螳螂と窺ふのありと

大略記九編卷十一

も申す羽柴三左衛門尉の家老東条武大夫と
とて討取てゆへとも三左衛門尉と討漏しゆ
是の三左衛門尉宝寺へ引返し加勢とたのぞき寄
来るあゝん我等兄弟佐太あゝり打出途中待
て是と討取可申と存付てゆと申を法印の
も思ひ寄たり急打出あゝと三百餘人と差添
霧坂もも揉て佐太の御ある天神の森の志
けも伏たりけり又貴崎主膳山谷伴大夫百餘人
と付て同一處に長蛇の備よとてさうめくとも
知と三左衛門尉吉長石田左吉よ心付ら霧坂と
りて引返しけりあまうよ心許すためよ

途中より東条武大夫と真先騎をたりけるよ東
条下部息も繼あゝ走り來り三左衛門尉と見る
路傍よりこまり申ける何者とも知ど
数百人霧坂に襲ひ來り只今落城に及び主人武大
夫并に佐原清右衛門を討死仕りゆと注進に三
左衛門尉の事を聞仰天の物もいれ相従ふゆ
の三四十人ありとゆへとも物も出仕の供ふ
まの素肌のためよとて物具したるもの一
人もいれ如何をとあゝとて立たる處を見
とす貴崎主膳山谷伴大夫百人の士卒と二手よ
引分関波を作りて推寄あまうとて攻付たり

三左衛門尉の中間は持とて鎗の川より寄手は向
ひ何れののちの狼藉至極の振舞定めて此邊の盜
賊ひるこの類の糧は困とてとんくさあさの業と
いあめくとも悪一人も餘をま引包んで切を
てよと下知とる儀勢の猛けきと我一人真先うけ
んとつよめのものも其間とて二三十間はあり
時耳めと響く鉄炮の音よつとて餘多の人数螺と
吹鐘太鼓と鳴く鯨波と作りて寄來る三左衛門尉
おちく驚さううととん宝寺へ引返はととも流
石よ口惜しく又く追逐く寄されの逃るとも脱を
やうとあめひ切盜賊とも不埒なる命おしく願

の筋と申出よ身不肖なれと天下の御後見羽柴少
將秀吉卿の一族よて羽柴三左衛門尉ありのり様
ふも取次て汝等の身の立行とてうらひ得させん
と呼られの盜賊ひるこのとあう是は佐久間
久右衛門尉安次同源六政實ありと名乗うけ叔父
柴田修理進勝家并兄玄蕃兄弟權六等の修羅の
苦慮と助けん為よ汝と打取んとあう待と知さ
る愚さよと呼らうとつと笑ふ羽柴三左衛門尉
の元より臆したる性質あり佐久間と聞て大に怖
と途と失ふて扣たる處へまこの響く鉄炮の音と
共よ誰とい知は百人あまの真幕よりけ寄て面も

ふくび無二無三よ突立よの三左衛門尉のふくあ
とてふふめと逃道と求むる處よ久右衛門尉源六
兩人鞍上よ立上り大将と脱をふ餘人よ目ふうけ
を三左衛門尉只一人と生捕よとと叫ひひう
よの山谷貴崎の人々大よ力と得あまうさうさ
しと進よ近つと攻立るゆとよ佐原清右衛門う長
子同清左衛門澤井正太郎主人と助け命ととて
戦ふと佐久間山谷の手のののとこよ白げく見
えけると佐久間源六走來りよとと敵の素肌よ
あうも三十餘人なり撰と打ようち取ゆと大音聲
よととと貴崎大よ勇きたち羽柴三左衛門尉

と遁さしと誠よ手あけく追掛ける處よ佐久間久
右衛門真先よ掛來り粉川法印の智畧よと霧坂
の城のよとと攻破り東条武大夫佐原清右衛門と
の討取三左衛門尉の妻子との一問處よ押込城よ
の法印入めたりたり其方とも今何處へ歸るへ
るよとと降参しと妻子と安堵さるとと聲々よ呼
くよとと聞て三左衛門尉肝と消實よ霧坂と乗取と
たうんよの實よ我身の一大事と彌十方よられ
体と見て佐原清左衛門の我父實よ戦死をう然
ともやむく討死とるゆとの父よもあふれりや
敵のくりりこととて我等う氣とあとさんためよ

ひつらうと又疑と起し何とよも此處を切抜その
上の事とあめへとも此時日とて夕陽よりこむ
るたまのいり急くと敵の前途を取切たるら
ん容易く入城あひもは其上實に城を取と
た〜い〜とへ行ても其詮あるま〜のりみやを
や〜と當惑の處へ佐久間兄弟ととまなく箭と射
うけ鉄炮と打うけひたせめ責付しうの三左衛
門尉今ハ是迫なりと思ひ切敵に向て切死と覺悟
し佐久間う勢のめりける頃を日暮と咫尺も
しらぬ闇夜なり又あひ返りしる闇夜に戦ふ
て名もふ下臆討とる末代迫の恥辱なり敵

も暗し心あきし〜幸手あけ追も甚是を究竟
の仕合あき〜落て見とやとあひ〜の髪
うきた〜て息うけ誰とも知ぬ様〜て田の
中の畦と傳ひ這々と渚楠葉〜一本〜して六里餘
り息とものつらと山崎の宝寺へ逃入て實の使ハ佐
久間兄弟うあ〜業城とハ粉川の三智法印に攻
取と妻子のいのしよ手あめり逢家老二人戦死せ
とありのま〜注進ハ佐久間兄弟ハ三左衛門尉
と見〜あひ安〜ぬ〜よあひ貴崎山谷と手
配〜ととら〜と尋ぬと闇の夜の車あれ
ハ終〜め〜り逢もをいたうひよ牙と〜て無念

うり何處へ逃しう念入て探し求めて高名よせん
 と逢ていさうと別とてい又松明とあり照し木の
 影敷の内のころうなをさすてうささめく探しけしと
 短き夏の夜明りころうとまをささめく探しけしと
 りよ三左衛門尉う即等よ澤井正太郎佐原清左門
 主の行末見うしあひ必死となりて佐久間う勢よ
 めらり合編木の如き太刀と打ありく弓手一の
 せの右手へころうし上段下段虎亂入奮迅獅子秘術
 と盡しと罵つ罵つ戦ひけるささめく敵よあ
 ここれの小高き岡よりけし上り是ハ羽柴三左衛門
 う即黨よ佐原清右衛門豊秋う子よ清左衛門豊定

ちう佐久間殿ハおとさぬり落しをあひしり父清
 右衛門ハとて戦死せしと聞冥土の路のころあ
 さひしくゆらんぞんぞんや某も思ふ敵よめくり合
 討死して父のためよ三途川の瀬あそと死手の
 山の道しるべ仕らんと存とるなりと云つて佐久
 間久方衛門と暗の夜あり探り足ねらひありて
 只一突とつけとも佐久間り運はよく突とつて
 佐久間よころうと行あさる佐久間をりさば鎗引を
 こめ手元より寄らりしと突清左衛門ハ突損し
 したり口惜や爰と逃さるひめくり合りこ
 一そとあ退ととこり直と鎗の穂先の稲妻ハ光り

目々ゆゑ見へりうら北國無雙の早業と人々知せ
一久右衛門あれい二度の鎗とも突あやまらさう
みせなりく立たる處へ佐久間源六を來りめく
と見あり大音よ我を誰とぞ思ふらん鬼柴田と呼
まし勝家り姪よ佐久間源六政實なりことさうとれ
とあらしめる聲と諸ともよ突出を大身の鎗よ胸板
と突ぬうしてあそむへし佐原清左衛門朱よあ
うて倒るるこの源六とりさげ下立あさく首と搔
てけり澤井正太郎の貴崎と鎗と合をけるう貴崎
の六尺有余の大兵やう澤井小男よとあらしめる素
肌あそむ打向あらしめるやうとあらしめるひげん

あいらりて逃出れと貴崎主膳の手よ持しめので
取しし心地しけるよあり何處までも逃さずと追掛より
中川秀春霧坂先陣と望む事
并澤井正太郎水難よ逢事
澤井正太郎の貴崎主膳よ追詰らむことくよめらよ
と見へりうら搔ありて逃りて一味方と尋ねるよ
或の討と或の落失更一人よもあそむことくよ
さうちよ敵よの勢ゆき加らると見へく篝火の
影やましく耿々と照そひけるよと臆病風よさを
と馬の平頭よあそむ鞭をうちけるよ馬はと
やうとくささうひ引りゆき走けるよあり路もあ

柗原と何處とも知を歩くゆく正太郎の
龍の袖柗の枝のわたりて其身と宙をつるさるさる
のつらゝ鞍の上もとさけるあまう馬のそのま
走のつらゝ行衛も知をありまけり正太郎の柗の枝
よめりりり地もも着をまゝ幹の高く放て
り此の敵を見付らまゝ如何をんと思ふ心を
かゝて脇差引ぬさ柗の枝を虚さまゝと切
いゝの不思議その身は水中へ落入つ水の流さの
くゆる丸木船の如く逆まゝ水は浮ぬ沈ぬ
三四丁流さけり貴崎主膳の澤井と見失ひつと
も詮方あけまゝ山谷佐久間と廻り合霧坂さ

引くこと澤井のこゝと水は溺れ半死半生の處へ
柴船一艘來りけり澤井に流るゝと人との
知と今日の軍と捨たるものあらん取上見んと手
とのへとちつりと掬は澤井のこゝと同一く手
をのへ船人の腕よつらとちつと付舟人肝とつ
あゝさそゝの溺れ人つと流さんと手を放さる澤井
のこゝめりり取付よあり互に引つ引つ力あま
り船人も同く川へ落入たり其後の如何は
なうげん知ののり又三左衛門尉のあゝひ宝
寺へ入り入淺野と逢て事の始末と語りける
淺野大さよ驚さそれの敵と欺りまゝととも一

城と預る身ののり敷次第りか大将の御前何と
ういふんと云夫のける處へ河別長野烏帽子形の
城主織田源五郎長益の許り早馬來りて佐久間
久右衛門同源六紀州粉川寺の三智法印と語りひ
計畧と以て羽柴三左衛門尉と誘引出し其跡へ多
人数おしを終り城と打破り東条武大夫佐原清
右衛門戦死し城の粉川法印入替り近邊を追捕し
勢強大に及ひひ早々御仕置あるべくいと注進に
秀吉の事と聞ひひさもあるへ佐久間兄弟奇特
ふ尤様の事と思ひ出たりささるへ右衛門尉り
子供りとあり然とて打捨おくへさあもあはる但

秀吉り出馬りこのころもあはる蜂屋出羽守塩川
伯耆守罷向ひひへと下知しおひける處に中川
平右衛門進出でて申様兄頼平清秀江州柳り瀬表
に於て佐久間玄蕃元り為り討死仕りてひより
幼年の秀春よ家督と賜り某の後見仕りへさよ
し仰出されひ佐久間玄蕃元り弟よひへ秀春り
父の仇との余類と申へく因て霧坂の討手と
御奉公りしめり秀春よ仰付らる様願ひ奉ると
思ひ切て言上しひさの秀吉聞ひ平右衛門り申
状充至極たり然り只今蜂屋塩川よ仰付ら
るしと忽り御變替あはるともいへるなり何と

めその品のあるへこのめのとと思召ひて其夜蜂
屋出羽守塩川伯耆守兩人とめし今夜の徒然か
り兩人ともゆるりと著坐あるへくゆと近習衆と
以て仰らまひるるあり蜂屋も塩川も夜明あゝ霧
坂へ向ふへさなり然ハ士卒の手配もありさゆ退
出とおひふ處あまとも大将のりゆうに仰出さる
ふと否今夜ともひひうぬいつとも澁々御前
ふ同侯とやありて秀吉出坐しあひめつらし
鯉と得たまひ兩人の衆は振舞申たくりり引留
しなり箸とりあふへしとて秀吉の引受く二三
盃とつくりそのうち盃と出しあふは蜂屋の上戸

あり鯉の羹よこの名酒のくくたきよやむへしや
と云て盃のうごど多く勸むは自然と坐中賑らし
しあるひの唱ひやまの舞ふたりけりうのちふ
の打らげきたまひあま追酔はけり塩川伯耆守の
下戸なりつむとも強てとめられしあれも
酔くのよとてうちあたり夜明あんととる頃よ
兩人とも起出て水とを顔あゝひのうよ出羽守今
朝の霧坂へ向らんと存とよ夕の酒も時刻と延
とよこのくやまの遅うり早打立んさ
りとて大将は御暇申さるあまたりと後日の
咎もありぬへしとて大将の見参よ入んとり

近習ののの立出両将より酔のさめぬより大
将ハ夕の酒のめく廻りてや今朝のいまも雷の如
きひひさうのて眠あつて何れとゆりおこして
起あふてさひさひ見へば両将の發途も大将知
ぬとぬといあつてあつて出立おひあの後日よ
何と申さるへ今あつて御待あつてといをき
兩人も近習衆のりあつて従ひ相あつておる
傍の障子のとと見あつて柳のつら置あつ
へ越前の雲丹のつらめり立ち上戸のつら
なる柳の口と見あつて見るよとや呑口もさつてあり
只一口と盃さつてのつら雲丹の瓶ひつら

つらと試みるよその味のよあつてけあも
大将あけんむる料の品あつて並々あつてぬも理
なり又一盃とつらつて終つて泥の如く酔
たりけり伯耆寺の飲されと出羽守一人と誤せ
といとせんも同座ありて云甲斐の然れ我も
のむへとおのひ切塩川もあつてひ盃とり上て
あれも同じく酔たりけり折しも河州の早馬あつ
波とつて霧坂の料川法印佐久間兄弟近郷近村
と押領してとて御大事と及ぶつて御征伐延
びゆく此邊の諸浪人野武士又のあつての共
馳加ふる人数も多し相なり可申は尤い

御手當も容易よゆりくいと注進これ引違ふ
狭山の野里十郎左衛門尉一族所從五百余人
霧坂へ押寄合戦と催ふし處城方強く野里
手ののの二百餘人討ち百余人手と負て引退く急
る御加勢と差下さるく十郎左衛門尉先陣仕
り御案内可申ゆと注進と然るは秀吉卿の
眠りて起むと討手と蒙りし兩将ハ二度酔てた
くひな起てハ倒あけてハそのめくつびさ
雷よ似てとさましく中川平右衛門この体と見て
討手と仰付らま二人の大將くくの如し然とて
征伐延引よ及らん道理もなり今一度申て見とや

と大將の御前と伺へ近習小性の面々列居るか
めろ只今御寝なり何とよても言上とへと便宜ふ
いと申て取合はさるハ兩人の大將たちよ入魂
見とやとおのひ立ち酒の香鼻をつらぬと倒
逆ふし呼起ととも起も上らと平右衛門急度思ひ
直し獨言しける様あけ我あり過て狭山の野
里へ近よ就て御許をまを向あて合戦
つるなり我等ハ所領も河内へ近し然ハ我等も近
よよりて御下知あくと向あへりこの
あまひなる道理と申て事く延々あり
今あらんや城際よ付あんののと後悔し近習

衆^もも向^むて申^ま様野里^のり例^{れい}もいへる中川^の一族^の只今^のあり
霧^{きり}坂^{さか}に罷^ま向^むひゆ後^{のち}も御沙汰^ののゆらん時^{とき}もく執^{しやく}
申^まさをもあふへと傍^{わらわ}に引^ひ廻^{まわ}し石田^の九吉^のまたの
置^まつる平右衛門^のの取^とりぬる宿^のの
所^{ところ}へくを帰^{かへ}り一族^の即^{すなは}ち従^{したが}り集^{あつ}め霧^{きり}坂^{さか}の追^ま手^ては向^む
せん^と廻^{まわ}文^{ぶん}とれとも一人^のも家^のに居^ゐる合^あはれぬと不^ふ
思議^{しぎ}と秀^{ひで}春^{はる}の常^{とこ}の座^ざ敷^{しき}に入^いりて見^みえぬ鎧^{よろい}兜^{たう}もあ
ひふを大^{おほ}刀^やや刀^やを取^とりぬる只^{ただ}今^{いま}打^{うち}立^たし様^{さま}を見^み
えぬゆり既^{すで}に見^みぬるゆりの日^ひ頃^{ころ}養^{やしやう}ひひひ名^な馬^ばと
も其^{その}数^{かず}ありたると一^{いつ}足^{あし}も見^みえぬと然^{しか}に秀^{ひで}春^{はる}霧^{きり}
坂^{さか}へくを向^むひくとたぬとて天^{あま}晴^はけあけぬる

振^{ふる}舞^まや瀬^せ兵衛^{べいゑ}清^{せい}秀^{しゆ}の嫡^{ちやく}子^しなり然^{しか}に我^{われ}等^らも向^むふへ
と鎧^{よろい}物^{もの}具^ぐとりぬるとひ馬^ば引^ひ寄^よてゆ^ゆりりと打^{うち}のり
中間^{ちゆうかん}二人^には腹^{はら}當^あさると左右^{さうぶ}の小^こ手^てとさうとて馬^ばの
口^{くち}取^とて足^{あし}輕^{かろ}に鎗^{やり}めを打^{うち}出^だて見^みえぬと秀^{ひで}春^{はる}と
あひくく柏^{かしわ}の紋^{いもん}の旗^{はた}をその勢^{せい}六^む七^{しち}十^{じゅう}騎^きゆ
みと揉^もて河^か内^{ない}路^ろさうとて發^{はつ}向^むひ平^{へい}右^う衛^ゑ門^{もん}あれと見^み
て鞭^{むち}と鎧^{よろい}と合^あを馳^ちたりしり秀^{ひで}春^{はる}の勢^{せい}も見^みり
り見^みぬる打^{うち}ぬると遂^{つい}に追^お付^つ平^{へい}右^う衛^ゑ門^{もん}聲^{こゑ}りけ
申^ま様夫^おへ參^まるの秀^{ひで}春^{はる}のゆりあはれ御^ご許^{もと}もあはれ
手^て勢^{せい}と催^{もよほ}ふ發^{はつ}向^むひる後^{のち}の御^ご勘^{かん}當^あと何^{なに}と
とるとなふむると聞^きもあはれ軍^{ぐん}の場^ばは向^むふ

の生てうくらんとおもひののなむい後のことと
へ思ひもゆるびと返答してまゝり馬とやらめ
けり平右衛門も少年よひさことこれ實も戰場
出るののら後の事と案して何と手柄のなるへ
さぞ悔しくも是等の事よめつらひ今追延引
たまとも秀春心たけくして中川の家光りと増
てけり某う後見その詮あーとくららへ霧坂
うけ向ひ勝まざる手柄あゝとけりさあぐ城
あけ入一足も引とて討まゝり二川の間と出ま
しとおのひ切てを向ひけりめくそ其日もとく
四時くらり大將御目と覺されあまのうら霧坂

の討手のことと忘まらる塩川蜂屋の何とをぞと
尋あふよ酔あゝと起もあゝと大将うらくと笑
くをまひ高名手柄もさめての上の事そくその
やゝとこいあひと宜ひしうの近習衆もあこし
をひやゝ時過て出羽守目ととく起りて是の
いうよ霧坂よ向ひて先登ととおのひつるよ爰の
大将の御次ありさく夕の酒のりよありつみさ
して臥たるり時過されともくや打立ん塩川
めよをーやと見返さへこれ酔ふ前後も知を
やゝとおこして諸共よ御大将よ御暇申て打立ぬ

大問記九編卷之十二

重修真書太問記九編卷之十二終

